The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	専門日本語ライティング能力の養成を目ざす学習課題の捉え方
Author(s)	村岡, 貴子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2010, 14, p. 49-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第14号（2010）

【特集　OUS カリキュラムの開発(6)】

専門日本語ライティング能力の養成を目ざす学習課題の捉え方

村岡　貴子*

要　旨

本稿では、留学生のライティング能力の養成を目ざした専門日本語教育における学習課題の捉え方について論じる。まず、先行研究を概観し、専門日本語教育の観点から、ライティング教育上の学習課題の捉え方、および関連する問題等に言及する。その上で、最近の研究および学習課題による授業実践での成功者のコメント等から、学習者の文章上における問題と種々の背景、および授業実践とスキーマ形成について論じる。また、以上から、留学生が来日前に日本語を学習する母国の大学の関係教員も含め、連続した教育の連携について若干言及する。

【キーワード】専門日本語ライティング能力、学習課題、テキスト分析タスク、スキーマ

1　はじめに

昨今、日本の大学に在籍する留学生を対象とした、専門日本語教育としてのライティング教育に関する多様なテーマを扱った研究や教材開発が一層盛んになっている。そういった研究や教材開発は、従来以上に細分化されたテーマやアプローチで実施されるようになってきた。本稿では、まず、専門日本語ライティング教育に関する最近の研究や教材開発について言及する。その上で、筆者の教育実践と研究から得られた知見をふまえて、特にライティング授業で重要な位置を占める「学習課題（タスク）」の捉え方について議論し、それをもとに、今後のライティング教育に資する視点の提示を試みる。

本稿では、専門日本語教育を、大学院レベルのアカデミックな研究活動を円滑に遂行するために必要な日本語能力の養成を目的とした教育と考える。また、専門日本語ライティング教育は、レポート、研究計画書、および論文等の専門的文章の作成能力の獲得を目ざすものとする。

まず、関連の先行研究として、佐藤（2006）は、サンプル論文を教材とした、大学院レベルの学習者を対象としたライティング教育の実践について報告した。また、二通他（2008）は、レポートや論文で論じる際に必要な表現集作成の報告を行っている。大島（2009）では、社会科学系の論文の論証部分に関する談話分析を行い、執筆に有用な指針を提供している。いずれも、特に大学院レベルの研究で必要となるライティング能力の養成という目的のための教育開発、あるいはそれに資する研究成果を示している。

また、最近開発された、専門日本語ライティング（以下、ライティング）教材の例として、日本学生支援機構（2009）や二通他（2009）が挙げられる。これらの教材の目的は、それぞれ、研究報告書の作成方法の支援、および、レポート・論文作成に有用な表現の提供である。これらの教材は、対象者の目的や必要とされる文章ジャンルを明確に規定していることが特徴であり、学部初年次から大学院までの汎用性の高いものではない。換言すれば、本格的な研究活動に必要とされる、特定目的のための日本語教材である。

* 大阪大学留学生センター教授

本稿では、以上のような研究と教材開発の現状分析を背景に、留学生30万人計画時代に向けてさらにニーズが増すと予想される、専門日本語ライティングの教育の方法について、学習課題（タスク）をキーワードとして論じることとする。

本稿での学習課題とは、次章で示すように、当該ライティングコースで一定のコンセプトを持ち、かつ、継続的に実施する個々のタスクを総称したものである。したがって、教材の特定の課で、あるいは授業で一時的に用いられる表現練習等は、学習課題には含まないものとする。

学習課題は、ライティング教育において、授業運営面からも、宿題等の課外学習の面からも、極めて重要なものと位置づけられる。それは、学習課題のジャンルや、その提出物へのフィードバックの方法が、学習者のライティング能力獲得の過程や、学習スタイルの形成等に、影響を及ぼす要素になると考えられるためである。つまり、学習課題とフィードバックは、ライティング教育のコースデザイン上、最も中心的な関心事の一つであると言える。

しかし、現状では、日本語による目的別ライティング能力養成のための具体的な指針や方法論の基準と言えるものは存在していない。また、学習者がライティング活動を行った成果に対するフィードバックの方法についても、その効果を検証した研究はほとんど見られない。そこで、まず学習課題を中心に、フィードバックを取り入れた授業方法を検討する目的で、教育実践を記述し、問題を分類して、教育の改善を目ざす研究を進める必要があると考える。

本稿では、学習課題を活用した授業、および学習課題へのフィードバックの方法について、先行研究と筆者の授業実践、学習者の意識に関する発話データをもとに議論を試みる。その際に、学習者の種々の背景にも注目する。後述の通り、学習者のライティング活動は、母語や英語による学習経験、研究環境等、多様な背景が影響する複雑な活動である。そのため、ライティングの授業実践を検討する際には、学習者の背景に配慮する視点も重要であると言える。

さらに、本稿では、上記の問題意識に基づいた議論を総合し、国の内外を問わず、今後重要性が高まるライティング教育のコースデザイン上必要な連携についても若干言及する。特に大学院レベルの学習者の場合、母国での日本語学習経験があることが多いことから、連続した教育の提供が必要になると考えられる。

次章では、まず、学習課題を活用した授業実践を実施する背景となった、学習者の文章上の問題等について述べる。

2　学習者の文章上における問題と種々の背景

ここでは、筆者の共同研究の成果をもとに、学習者の文章に見られる問題について説明し、その上で、それらの問題の背景となる、研究や論文に関するスキーマ（以下、スキーマ）の欠如に関して議論する。

2-1　学習者の文章上の問題 - 先行研究から -

村岡他（2007:102-105）は、大学院レベルの8名の理系留学生（日本語中級レベル）が7回のタスクで作成した文章を対象として、文章構造と論理展開の問題の解明と、その分類を試みた。その結果、問題の原因として、1)文末のモダリティー表現、2)段落内外における文あるいは段落自体の配列順序、3)結論部の論述方法（本論との論理的関係があいまいで、スローガン的主観表現で文章が終わるもの）、4)引用の手続き、の4点が具体的事例として抽出された。

また、村岡他（2008:6-7）では、文系・理系留学生および日本人理系大学院生の計50名分の文章を対象とし、論理の一貫性や段落内外の結束性について分析を試み、問題の抽出と分類を行った。それらの問題は、書き手の論理の構築にかかわる認識の構造に深く関係していると考えられることから、文章の「論理構造」の問題と呼んだ。分析の結果、母語や専門分野を問わず、論理構造の問題として、1)序論と結論の整合性、2)段落内外の結束性、3)段落間の関連付け、4)引用の問題が抽出できた。

以上の問題は、上記の村岡他（2007）の場合も同様に、①主張や引用等のモダリティー表現が機能する情報の「質」の判断、②情報と情報の「関係性」の把

握、③上記関係性の「表示」の全て、または、そのいずれかの不成功にあるとまとめられる。

上記2件の研究で示した引用の問題について若干補足しておく。この問題は、引用しようとする文章内容を、例えば事実か推論かといった情報の質自体がその文脈内で明確に把握できないまま、書き手自身の文章に安易に挿入したケースである。事の重大さに対する書き手の意識の問題もあるが、本来、そういった剽窃行為は、書き手自身の文章で適切に選択された表現により構築するべき論理構造自体が、既に破綻している証左であると考えられる。なお、佐藤（2007）は、日本人大学院生の剽窃に関する学習経験の調査から、十分な教育が行われていない問題を指摘し、大学全体での取り組みの必要性を訴えている。

以上の通り、調査対象とした学習者の文章における深刻な問題は、表層的な表現や文法の不備ではなく、文章の構成や論理展開に関するものであった。これらは次に示すように、研究や論文に関するスキーマ（以下、スキーマ）の欠如に起因するものと考えられる。

2-2　学習者の背景としてのスキーマの有無

ここでは、因他（2008）、村岡他（2009）での議論を中心にまとめる。まず、スキーマが未形成である未成功者の場合には、前節の文章構造や論理展開に関する重篤な問題が見られることがわかった。このことは、タスク（次章で詳述）を中心とした授業実践、学期末に実施した、他者の文章に対する評価、および自己の学習に関するアンケートとインタビューによる調査の結果、明らかになった。

上記とは反対に、スキーマを有する成功者の場合には、厳密な文章評価の能力を有しているだけでなく、外国語学習に対して一定の信念を有していた。また、それらは彼らの個々の学習活動に少なからぬ影響を及ぼしていることが示唆された。具体的には、まず、単に表現や文法といった「部分」に捉われず、段落構成、トピックセンテンスの所在、および文章における論理の一貫性にも及ぶコメントを提示していた。このように、「部分」ではなく、「全体」や「構造」を意識的に捉える視点は、成功者と未成功者との著しい差異であった。また、成功者は、言語学習そのものを、研究活動や過去の種々の学習経験と関連付けて捉えたコメントを行っていた。例えば、ある文章評価として、研究室で読む論文の文体と同じであるとのコメント、また、過去の英語学習における批判的な読みや、文章評価活動を想起したとのコメント、さらには、クラスメートとの協働による学習活動の意義を認め、研究室においても日本人院生と協働的に研究や日本語学習を継続したいといったコメントである。

加えて、調査対象としたケースでは、英語によるアカデミック・ライティングの学習経験を有する学習者は全員、成功者であることがわかり、また、成功者であるか否かは、文法や漢字の知識の多寡に関係しないことも判明した。

2-3　スキーマ形成を促す方策

前節で示した、スキーマが未形成である未成功者の場合には、従来のように、モデル文を提示するだけでは不十分であることが示唆された。そこで、複数の文章の比較や訂正、評価を行う学習課題（タスク）を継続して実施するようにカリキュラムを設計した。具体的方法は次章で述べる。

このタスクの継続により、学習者は他者の文章から学び、他者の具体的な文章評価コメントを聞くことにより、客観的かつ批判的に読む視点の獲得が促進されると考えられた。また、学習者のコメントからも、定期的な学習活動の有用性が示された（例：「毎週決まった課題とスケジュールがあるため、毎週作文について考える習慣がついた」因他 2008：31）ことから、カリキュラム上、一定の方法を用いた継続性を有するタスクを実施することとした。

以上のことから、スキーマ形成を促進するためのタスクは、1)意識化を促すトレーニングとしての位置づけ、2)協働作業の習慣化、3)過程を重視する学習スタイルの形成、の3点が特徴であると言える。また、そのタスクを用いた授業実践において、学習者のスキーマ形成の過程から、ライティング能力獲得の過程が観察できると期待できる。

つまり、学習者のプロダクトとしての文章自体の研

究や、モデル文の提示を中心とした教育開発とは異なる、学習者の意識や背景に着目した、新たなライティング教育とその研究についての視点が導き出されたと言える。

3　学習課題による授業実践

本章では、第2章で提示したタスクの実践の詳細を紹介する。また、その方法で実践した授業における学習者の発話データをもとに、スキーマを有する成功者としての学習者を厳選し、特に彼らの文章評価に関する意識を分析する。

3-1　日本語テキスト分析タスク

本稿での学習課題として「日本語テキスト分析タスク」を示す。これは、基本的に学習者協働による課題遂行タイプの実践として課したものである。

日本語テキスト分析タスクは、毎週、授業でのフィードバックのために学習者の文章を編集して、訂正、比較、評価のタスクを加えたものである。授業の流れと同タスクについては、基本的に村岡他（2009）で示したものと同様であるため、その一部（p.24）を抜粋しながら説明する。

授業の目標は、研究活動に必要な文章の特徴を理解し、短い報告文の作成ができるようになることである。授業は、2009年10月から2010年2月までの15週間週2コマ（1コマ90分）実施した。学習者は9名であり、その日本語能力は中級レベルであった。

学習者は、授業において、『大学・大学院留学生の日本語2作文編』（アカデミック・ジャパニーズ研究会編2001 アルク）で表現や構成を学習した後、教材中の400字～600字の作文課題をEメールで教師に提出した。課題は基本的に3段落構成で、各段落の内容の枠組み（例：現状の説明、問題の分析、意見）が示されていた。教師は学習者の文章を文法・表現・表記に限って添削し、翌週の授業時の「テキスト分析タスク」実施後に学習者に返却した。

「テキスト分析タスク」（3-2-1以下で分析対象の文章を例示）は、提出された未添削の文章の一部から教師が200-300字程度の段落ごとに抜粋して編集した模範例や問題を含む例を用いて、学習者全員が適切性を検討し合う活動であり、1タスクに平均30分前後を費やした。目的は、他者の文章・観点から学ぶという学習ストラテジーと批判的に読む視点の獲得である。学習者は例を読んだ後に、表現・構成・論理展開について自由にコメントを述べ合った。学習者からの質問は可能な限り他の学習者に検討させた。

このタスク後に添削済みの個々の文章を返却し、各自が添削部分を読んで再検討した。その間、教師は個別の質問に対応した。この学習者自身の課題の再検討は、文法や語選択等への過度の注視を避け、文章全体の把握を可能にすることを目的とした。

翌週には前週チェックを受けた文章の修正版を提出させた。すなわち、毎週の課題は新たな文章作成と前週の修正版作成の二つである。なお、学期末には、各自の専門分野のテーマで5,000字～7,000字の最終レポートを作成させた。最終授業では、ライティング学習全般を通しての自己の変化を認識させることを意図して、学期当初に作成した未添削状態の文章を学習者自身に修正させた。

次節では、同タスク実施時の成功者の発話を分析する。

3-2　タスク実施時における学習者の文章評価コメント

本稿では、授業実施期間のオリエンテーション時と初回を除き、合計6回のタスクによる授業実践において、成功者と判断された学習者のコメントや感想の発話を記録したデータを用いて、彼らのスキーマ形成に関して論じる。

成功者であるか否かの判断は、因他（2008）と村岡他（2009）を参考に、学期末に筆者が行ったもので、提出物の全文章と学期末のインタビューにより判断した。彼らは、授業での発話量が比較的多いだけでなく、通常のタスクの文章における構成や論理展開の質の高さから、明らかにスキーマを有すると認められた。また、彼らは、一度も剽窃行為がなく、かつ自身の日本語学習を客観的にモニターしていた。3名のうち2名は非漢字圏、1名は漢字圏であり、非漢字

圏の１名のみが文系で、他の２名は理系であった。

授業での学習者の発話は、学期当初より、研究補助者が、学習者に許可を得て授業に同席し、パソコンを用いて１人１人の発話を入力し、授業後に筆者が入力内容をチェックした。全発話を録音したものではないが、得られたデータを用いた試験的な分析は有用であると判断した。

以下、対象者３名の発話内容を、文章構成や論理展開、表現の厳密性に言及したものを、1)内容と構成、2)文間か段落間の論理展開、3)表現の選択、の３点に分類し、タスクの具体例にそって説明を加える。

なお、本研究での調査に先立ち、学習者全員に、学習者が作成した文章は、個人情報保護に細心の注意を払い、教育・研究上の資料に用いる旨、書面で了解を得てある。

3-2-1　内容と構成

ここでは、テキスト分析タスクの一部を抜粋し、それに対して出された成功者のコメントを引用する。コメントはすべて普通体とし、文法や表現の誤用は訂正してある。

次の（1）はタスクにある、インターネットの問題について書かれた文章の一部である。

文章例（1）周知のように最近はネットの掲示板を利用して、殺人や殺人予告をするケースがある。2009年に東京の秋葉原で起こった通り魔事件も、犯行前に掲示板への書き込みがあったと報道されていた。青少年への悪影響は言うまでもない。近年、青少年の犯罪自体は減少してきているが、インターネットが絡んだ犯罪は多くなってきている。（後略）

これに対して、成功者の１名は、次の通りコメントした。

コメント①　構造がいいと思う。みんなの知っていることを述べて、関係するもっと広い問題を説明している。

上記（1）の後半には、子供のコミュニケーション手段となったインターネットで「ネットいじめ」が起こり、登校拒否になるケース等について論じられている。コメント①は、段落内外の論理展開を明確に把握できており、かつ、本論の導入としての、読み手の既有知識を活用した書き方を評価したものである。

次の（2）は、リサイクルに関するテーマで書かれた文章の最終段落にある結論部分である。

文章例（2）これから、私たちがしなければならないことは自分の国にあるリサイクルする方法をつづけ、また、他の国でリサイクルの方法も必要に応じて、採用しなければならない。また、できるだけ、買い物の際に、普通の商品のかわりに、リサイクル商品を買った方がいいと思われる。まだ環境を守るようにできることがさまざまあるので、新しいリサイクル方法を探さなければいけないと思われる。

これに対して、１名は次のようにコメントし、他の学生も同調した。

コメント②　急な終わり方である。何か残っている感じがする。

文章例（2）は基本的に本論部分をまとめたものである。コメント②は、（2）では、末尾に、環境を守るために可能なことがあることに言及したのみで具体例がなく、議論がまだ続く調子であることを、明確に捉えたコメントである。

3-2-2　文間か段落間の論理展開

次の（3）はリサイクルをテーマとした文章例である。

文章例（3）現在、さまざまなことが行われている。例えば、プラスチックの生産費は高く、使い終わったプラスチックをリサイクルせずに燃やすと、地球温暖化の原因の一つとなる。そのため、あるスーパーは客がプラスチックを持って来ると、エコポイント５点を加点する。1000点たまるとキャッシュバックがもらえる。また、個人的に不用な紙や読んだ新聞や雑誌などを集めて、再生利用するように気を付けることも行われている。

これに対して、成功者の２名は次の通りコメントした。

コメント③　２番目の文は前文との関係がない。事

実としては関係があるが、段落の中ではあいまいである。また、詳しい説明の目的ははっきりしていない。

コメント④　説明が詳しすぎる。スーパーの宣伝になっている。

彼らはいずれも段落内の中心的な主張を捉える読み方により、各文同士の関係も厳密に把握しようとしている。

(4) はインターネットの問題を論じた第1段落である。

文章例 (4) インターネットの問題は、どこでも犯罪が起こり、それを警察が取り締まれないことである。他の問題は、どこでもインターネットが使えるので、人はいつもインターネットを見ており、実際の人間社会にある本物について考えられないようになることである。例えば、アメリカで電車の運転士は携帯電話を見ていて運転を十分に行わなかったため、他の電車と激突した。人間はインターネットを現実より重視する場合もあって危険である。

これに対して、2名は次のようにコメントした。

コメント⑤　1つだけ選んで分析すべきである。ここではたくさん書いたので、分析できない。現象の羅列になっている。

コメント⑥　最初の文は「犯罪」についての分であるが、次は別の問題になっていて、スムーズではない。最初の文についてもっと説明が必要。短い段落であるため、テーマは1つのほうがいい。

これらのコメントの主旨は共通している。彼らは、1段落内に収斂しない複数のメッセージを入れることは望ましくないと認識しており、それを明確に言語化できている様子が観察された。

次の (5) は、教科書に示されたグラフを参照しながら、高齢化社会の問題を論じたものである。

文章例 (5) 日本では、1990年に65歳以上の人口の割合は、主要諸国において、最も低かった。その年に、65歳以上の人口の割合は12.1%であった。スウェーデンと比べれば、6%の差があった。しかし、日本は2025年まで65歳以上の人口の割合が最も高くなると推定されている。グラフにおいて、日本の人口統計は、急速に変化することがわかっている。そのような人口統計の変化は高齢化と呼ばれている。

これに対し、1名は次のようにコメントした。

コメント⑦　スウェーデンと日本を比較したが、その後スウェーデンが消えた。スウェーデンは結論の段落と関係がないので、どうして比較したかわからない。段落のバランスがよくない。

このコメントも、段落内の各文で構成される論理展開の問題を的確に捉えたものと評価できる。つまり、⑦は、各文が過不足なく情報を正確に伝達しているかどうかの問題を、批判的に読める読者として追及していると言える。

3-2-3　表現の選択

詳細な例示は割愛するが、表現の厳密さに言及したコメントや、表現の繰り返しによる冗長さを指摘するコメント、あるいは、「～になってしまっても」における「～しまっても」に見られる主観性の問題を指摘するコメント等があった。つまり、成功者は構造や論理展開といった文章の全体的な側面に注目できるだけでなく、学術的な論述に求められる表現の厳密さや文体的特徴に対しても、意識が十分に及んでいることが観察された。

これに対して、成功者とは言えない学習者は、表現や文法、漢字にのみ注目し、文章の論理展開の適否とともに、表現としての部分が論理構造に影響する問題までは批判的に把握できていない状況が対照的であった。

4　まとめと今後の課題

以上に示したテキスト分析タスクは、クラスメートと協働で実施することから、他者の視点や批判を知ることにより、自身の文章作成にも、読み手にわかりやすくしようと努力する姿勢が徐々に定着していったことが観察された。また、実際にアンケートおよびインタビューにおいても全員から高い評価が得られた。

さらに、論理展開について一定以上の質を保った文章を作成し、適切に文章評価できる成功者の学習者も、学期当初から批判的に多くのコメントを述べていたとは必ずしも言えず、徐々に論理展開や全体構造へのコメントが的確に、かつ多くなったと観察された。この点の詳細はさらに分析を深め、別稿に譲りたい。

以上のライティングの学習課題を用いたフィードバックを、学習者が協働で行う方法に対しては、一定の評価が得られた。ライティング能力養成の過程には、文章の構造や論理展開の把握が適切に行えるスキーマ形成が深く関与しており、成功者はその形成が迅速に行われていると推測される。本稿では、スキーマ形成を促す学習課題とフィードバックを授業で協働的に行う方法が一定程度有用であることがわかった。今後、学習者の背景や意識をさらに解明できれば、スキーマ形成過程が明らかになると期待できる。

ライティング能力養成には、教員側の意識変革も重要である。例えば、劉（2009）は、中国の複数の大学での調査から、日本語学習者が文章作成時に論理展開に困難を感じることを指摘し、指導方法の工夫の必要性を強調している。

今後、日本語の既習者は増加すると予想される。国の内外を問わず、各教育機関の関係者の間における連続した教育のための、情報交換と共通理解の形成が一層重要になるであろう。特に、学習者が母国で何年間も日本語を学んだ上で日本に留学する場合、実際に、母国における一方的な教授スタイルにかなり慣れているために、協働学習の効果や批判的な読みの意義がなかなかわかりにくいケースも存在している。学習者の大学や大学院でのアカデミックな目的、つまり実用的な目的のための日本語学習の方法をより効果的にするために、日本語教育の関係者が十分に議論を尽くす必要がますます高まっていると考えられる。

付記

本稿の一部は、第3回大阪大学専門日本語教育研究協議会（2010.3.9）において発表した。また、本研究は平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)「日本語教員と理系教員との協働による論文作成支援リソースの開発と評価」（課題番号19520457 研究代表者 村岡貴子）、および平成21年度科学研究費補助金基盤研究(B)「留学生大量受入れ時代に向けた大学における新たな日本語教育スタンダードの構築」（課題番号21320093 研究代表者 西口光一）の助成を受けて行った。

参考文献

大島弥生（2009）「社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析」『専門日本語教育研究』第11号,pp.15-22

佐藤彰（2006）「日本人大学院生の剽窃に関する学習経験・知識・意識の研究－質問票およびそれに基づく集団討議・集団面接のデータから－」『言語文化共同研究プロジェクト2008：アカデミック・ライティング研究 - 日本語と英語の場合 - 』pp.15-26

佐藤勢紀子（2006）「多様な専門分野のサンプル論文を用いたアカデミック・ライティングの指導法 」第8号,『専門日本語教育研究』第11号,pp.39-44

竹内理（2003）『より良い外国語学習法を求めて - 外国語成功学習者の研究 - 』松柏社

因京子・村岡貴子・米田由喜代・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也（2007）「日本語専門文書作成支援の方向 - 理系専門日本語教育の観点から - 」『専門日本語教育研究』第9号,pp.55-60

因京子・村岡貴子・仁科喜久子・米田由喜代（2008）「日本語テキスト分析タスクの論文構造スキーマ形成誘導効果」『専門日本語教育研究』第10号,pp.29-34

二通信子・大島弥生・因京子・佐藤勢紀子・山本富美子（2008）「論じる行為への理解を進める論文・レポート作成支援表現集の開発」『専門日本語教育研究』第10号,pp.53-58

二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子（2009）『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会

日本学生支援機構（2009）『研究計画書の書き方』凡人社

村岡貴子・因京子・米田由喜代（2007）「理系大学院

レベル留学生のライティングに関する問題の調査・分析 - 日本語論文作成支援リソース開発のために - 」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.101-106
村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2009）「専門文章作成支援方法の開発に向けて：スキーマ形成を中心に」『専門日本語教育研究』第 11 号,pp.23-30
劉偉（印刷中）「中国の大学の上級日本語学習者におけるライティング意識 - アンケートおよびインタビュー調査を中心に - 」『东亚地区日语教育日本学研究前沿文存』中国・華東理工大学